

表現法の体系について

木原茂

一 表現法とは何か

一つのものやことには、一つの言葉、一つの言い方しかないというものではない。例えば、庭の松の木が、時には「松の木」とよばれ、時には、「庭木」とよばれ、時には「財産」とよばれる。これ

は対象をとらえる角度の相違によるのである。このことは、オグデン・リチャーズ氏の、つぎの意味三角形によって、構造的によく知られている。^①

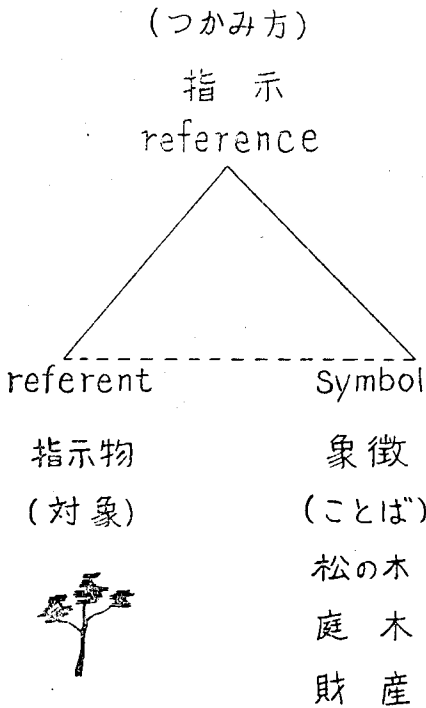
この図が示すように、ことばは単に対象を指示するのではない。それは同時に、対象のつかみ方を示しているものである。

表現法とは、そこに使われていることばを対象のつかみ方のあらわれとしてとらえたものである。例えば、「松の木」というのは、植物学的見方から、「庭木」というのは、住いの構成物という見方から、「財産」というのは経済の面からとらえたことばである。

物をとらえる見方は、厳密には無数にある。が、ともかく、それはことばによって定着されている。そこで、ことばを頼りとして、表現法にはどういふものがあるのか、それはどういふ体系をなすのかということについて考えてみたい。

二 レトリックにおける表現法の体系

表現法の研究としては、まずレトリックがある。そこで、レトリックでは具体的にどれだけの表現法を明らかにしているか



調べてみよう。

ブルトン嬢は、じぎの三十六の表現法をあげている。^⑥

- 1 Metaphor (隠喩法)
- 2 Simil (直喩法)
- 3 Analogy (類推法)
- 4 Personification (擬人法)
- 5 Metonymy (換喩法)
- 6 Synecdoche (提喩法)
- 7 Euphemism (遠曲法)
- 8 Prolepsis (予弁法)
- 9 Transferred Epithet (転移修飾語法)
- 10 Syllepsis (一語双叙法)
- 11 Zeugma (輓語法)
- 12 Inversion (倒置法)
- 13 Hyperbole (誇張法)
- 14 Litotes, Meiosis or Understatement (緩敘法)
- 15 Pun (地口、語ろあわせ)
- 16 Alliteration (頭韻法)
- 17 Assonance (中間母韻押韻法)
- 18 Onomatopoeia (声喩法)
- 19 Irony (反語法、皮肉法)
- 20 Antithesis (対照法)
- 21 Epigram (警句法)
- 22 Paradox (逆説法)
- 23 Oxymoron (矛盾語法)

- 24 Repetition (反復法)
 - 25 Aposiopesis (頓絶法)
 - 26 Rhetorical Question (修辭的質問)
 - 27 Apostrophe (呼びかけ法)
 - 28 Climax (漸増法)
 - 29 Anti-Climax (逆漸増法)
 - 30 Innuendo (諷刺法)
 - 31 Periphrasis or Circumlocution (遠曲法)
 - 32 Surprise Ending (意外な結末)
 - 33 Playful use of Colloquialism (口頭語の遊戯的使用)
 - 34 Conscious use of Cliché (常套語の意図的使用)
 - 35 Quotation (引用法)
 - 36 Literalism (文字通りの意味で使う方法)
- ブルトン嬢は、これに「レトリックの科学」(The Science of Rhetoric)と名付けているが、これでは羅列しているに過ぎない。これらは一休とだけに分類されるかが当然考えられなければならぬ。
- わが国では、明治・大正に西洋修辭学を輸入して多くの修辭学書が現われたが、その中、よく普及した島村瀧太郎(抱月)氏の「新美辭学」ではつぎのような分類が行われている。^⑦
- 譬喩法(想念の増殖に基けるもの)
- 1 直喩法
 - 2 隱喩法
 - 3 提喩法
 - 4 換喩法
 - 5 諷喩法
 - 6 引喩法
 - 7 声喩法
 - 8 字喩法
 - 9 詞喩法
 - 10 類喩法
- 化成法(想念の変形に基けるもの)
- 1 擬人法
 - 2 頓呼法
 - 3 現在法
 - 4 誇張法
 - 5 情化法

布置法 (想念の排列式に基けるもの)

- 1 対偶法
- 2 漸増法
- 3 反覆法
- 4 倒装法
- 5 照応法・
転折法・抑揚法

表出法 (想念表出の態度に基けるもの)

- 1 警句法
- 2 問答法
- 3 設疑法
- 4 咏歎法
- 5 反語法
- 6 曲言法・詳略法

この分類は独創的な面白い分類だと思われるが、一体何を基準にして分類したものか、また構造としてはどうなるのかもはっきりしない欠点がある。

最近、ペーカー氏はつぎのような分類を示している。⁹⁾

A よく知っているものに結びつけたり、古いものを新しく使ったりするもの。

anamnesis (想起法)

parachresis (語を新しい文脈で効果的に使う)

paradiorthosis (有名な語をねじって使う)

paroenia (諺を新しい状況に使う)

B クライマックスを作るもの

asyncleton (接続詞なしになぐらもの)

climax (漸増法)

incrementum (最低から最高へと並べる)

synonymy (類義語による繰り返えし)

C 強調するもの

anacoenosis (読者への問いかけ)

apodioxis (一つの考えの拒絶、否定)

apostopesis (頓絶法)

apostrope (頓呼法)

cephonesis (詠歎法)

erotesis (修辭的質問法)

D 皮肉をいうもの

antonomasia (個人を一般名で言う法)

apophysis (それは言わないと否定して、実は逆に、それを強く感じさせる法)

aporia (様々に疑ってみる法)

epitrope (皮肉に許可する法)

euphemism (遠曲法)

ironia, dramatic irony, sarcasm (皮肉、あざけり)

litos (緩敘法、控え目という)

oxymoron (矛盾語法)

zeugma (軋語法)

E 誇張したり、矮小化したりして言うもの

auxesis (誇張法、皮肉に)

hyperbole (誇張法、強調したり、滑稽化したりするため)

hypothesis (假定法)

moisis (大きいものを矮小化するという)

F 対照するもの

antithesis (対照法)

chiasmus (交錯法)

comparison (比較法)

dilemma (両刀論法)

dissimile (不同法)

enantiotis (交錯をともなう対照法)

G 洗練するもの

epanorthosis (正確にもつ一度言いなおす)

exegesis (同一文中で詳しく言いなおす)

exergasia (同じものを言いかえる)

hirnos (同格のものを重ねる)

horismos (定義する)

H 反復するもの

alliteration (頭韻の反復)

anadiplosis (前句の終りの語を、後句の初めに使う)

anaphora (前句の初めと、後句の初めが同じ)

antacacsis (同じ語を別の意義で使う)

epanalepsis (前句の初めと後句の終りが同じ)

epistrophe (数文の終りがみな同じ)

epizeuxis (同語反復)

homeoteleuton (尾韻の反復)

paremenon (派生語での反復)

paronomasia (地口、掛けことば)

plote (文字どおりの意味をくりかえす。その戦いでシーザー

はシーザーであった。)

I おきかえるもの

hendiatys (形容詞十名詞を名詞十名詞の形で言う)

metaphor (比喩法)

metonymy (換喩法)

parabola (寓話法)

paradiastole (遠曲法)

prosopopeia (擬人法)

synecdoche (提喩法)

J 雑多なもの

hyperbaton (優雅さのための語順変換)

martyria (自分の経験を言ひて証明する)

metabasis (これまでの論をたしかめて進む)

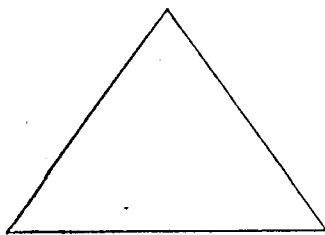
mimesis (模倣)

synchoresis (逆襲するため、一応相手の言を認める)

ここでは相当多くの表現がとりあげられ、わたしたちはこれまで無意識であったが、なるほどこういう表現法がたしかにあると、改めて意識されるものもあって興味深い。その上、分類されているので、全体把握が便である。しかし、この分類も、一体どういう基準で分類されているのか明確でない。

およそ表現という行為は、下の図のような、要素関係で成り立つものである。とすれば、大きく、まず対象に向かうものと、読者に向かうものに分け、対象に向かうものをさらに、語や句の範囲のもの(古い修辞学で「転義」といわれるもの)と、排列や

対象



送り手

受け手

組み立てて関するもの（古い修辞学で「辞様」とよばれるもの）に分け、つぎのような分類ができるのではないかと思う。

I 対象に向かうもの

一 語や句に関するもの（転義）

- 1 比喩（具体的イメージを与えるもの）
- 2 経験に結びつけるもの
- 3 洗練するもの（厳密にするもの）
- 4 誇張、縮小するもの（変形するもの）

二 組み立てて関するもの（辞様）

- 1 反復するもの
- 2 クライマックスを作るもの
- 3 対照するもの
- I 受け手に向かうもの
- 1 皮肉をいうもの
- 2 相手の気をひくもの

（下のA、B、C等の符号はペーカー氏の分類に相当するものである。）

三 「玉露の入れ方」における表現法

分類とか、体系とかいうものは、ただそれだけでは、あまり意味のあるものではない。それが実際に適用されて、表現や読解に働く力をもつ時、はじめて意味あるものとなる。とすれば、以上の表現法の分類は、実際の文章にどのように適用されるであろうか。つぎに極めて日常的で卑近な文章として、玉露の入れ方を説明した二つの文章がある。この文章について、それぞれどのような表現法が使用されているか、分析してみよう。

I A G E B H D C

玉露の入れ方

小川八重子^③

湯の注ぎ
方
湯の温度

「箱入り娘」のように育ったお茶ですから、ぬるいお湯でゆっくり入れます。湯かげんは六十度から七十度くらい。沸騰した湯わかしを火からおろしてふたを取ると勢よく湯気が立ちますが、二三分くらいすると、その湯気がゆらゆらと横に揺れてきます。その時が大体七十度くらいです。

茶の量

茶量は茶のよしあしによって違いますが、ひとり分テ

湯の注ぎ方

イスブーン一杯くらいが目安になります。玉露は三人以上五人までが入れやすいでしょう。きゆうすに茶を入れ、ゆっくりお湯を注ぎます。ほんとうの玉露の味を味わってみようと思われたら、葉がやとひたひたにつかる程度のお湯を入れてみてください。玉露は煎茶でなく、あくまで味本位ですから、少なくとも気になさることはありません。一煎目は甘く、二煎目は苦く、三煎目は渋く出ます。一煎目は葉にお湯を吸い取られるので量も少なくなります。二煎目は、それによいのです。盆の上に並べた玉露茶

湯の量

わんに均等に入れましょう。初めのうちは味はなく、あとになるほど出て、最後の一滴でほんとうの持ち味を出すために、何度もお茶わんの上を往復しているうちによい味が出ます。

味の変化と茶液の量

お茶の茶わんへの注ぎ方

総括

玉露はほんのちよっぴりと舌の上をこるがすようにしていただけものだから入れる時にその独特の甘味と香気を殺さないように十分気をつけなければならぬ。

原理

千宗興^④

方法

— 12 —

湯の温度
味の変化

湯かげんは煎茶よりぬる目がよく、ちょうど七十度くらいで、抹茶の時の湯の熱さと同じである。第一煎でかおりを、第二煎は甘味、第三煎で苦味をと三様の味を楽しむのが玉露好きの醍醐味とする。

湯の注ぎ
方

「熱い玉露を」といくら所望されても、決して熱い湯をじゃっと入れないよう。やはり煎茶同様、器を湯通ししてから、五人前で小さじ四杯ほどの量をきゅうすに入れ、適温の湯をきゅうすの端からそっと注ぎ、ふたをして三分くらいそのままにしてつぐと、たいへんおいしくいただける。

湯の量

二煎目のつぎ方
三煎目のつぎ方

煎茶と同じようにつぐが、湯の量の少ないことがたいせつなことで、きゅうすの中でお茶が動くようにつぐとまずくなる。二煎目を入れる時は一煎目と同じ要領で、こころもち湯の温度を高くする。三煎目は湯ざましの湯をお茶の上から、ざっと回してかけるとよく、お客様に勧めるのは三煎目までで、あとは使わないのが普通になっている。

この二つの文章の表現法を、修辞学の立場でみると、つぎのようなものがとらえられる。

1 比喩

a 直喩法

○「箱入り娘」のように育ったお茶ですから

○舌の上をころがすようにして

b 声喩法

○湯気がゆらゆらと横に揺られて

○葉がやっとひたひたに^①つかる程度

○ほんのちよ^②っぴりと舌上をころがすようにして

○熱い湯をじゃ^③っと入れないよう

○きゅうすの端からそ^④っと注ぎ

○ざ^⑤っと回してかけるとよく

2 洗練するもの

○茶量は茶のよしあしによって違いますが、

3 誇張するもの

○甘味と香気を殺^⑥さないように

○玉露好きの醍醐味とする。

まずは、これくらいである。ということは修辞学がとらえた表現法は、この種の文章ではあまり使用されないものだということである。やはり、修辞学は、大衆を前にしてうつ大弁論における表現法の研究から出発したものだということを思わせる。

「レトリックとは、効果を得るために、普通とは変った表現をすることである。」^⑦という定義があるが、この変ったものではない、むしろ普通の表現法として、どういうものがあり、それはどういう体系をもつものかということが現代のわれわれにとっては必要である。

では、右の文章ではどのような普通の表現法が使われているのだろうか。

この二つの説明で共通している事項はつぎの四つのことである。

① 湯の温度と入れ方はどうすればよいか。

② 湯の量はどれくらいにすればよいか。

③ 茶の量はどれくらいが適切か。

④ 茶の味はどうあるのがよいか。

玉露の入れ方を説明するポイントとしてはおそろくこれでつまるのであろう。

まず①の「湯の温度と入れ方」について言えば、その要点は

○ ぬるい湯でゆっくり入れよ。

ということである。これで受け手には十分わかるわけであるが、この表現は抽象的なので説明としては不親切である。そこで、実際には、つぎのようなさまざまな拡充がなされている。

まず「ぬるい」ということについて

○ 六十度から七十度くらい。(小川)

○ ちょうど七十度くらいで (千)

という説明がなされているが、これは数値による説明で、客観的科学的説明である。

○ 沸騰した湯わかしを火からおろしてふたを取ると勢よく湯気が立ちますが、二三分くらいすると、その湯気がゆらゆらと横に揺れてきます。その時が大体七十度くらいです。(小川)

これは、「ぬるい」ということを、行動と感覚の描写によってした説明である。それに対して

○ 湯がげんは煎茶よりぬる目がよく……、抹茶の時の湯の熱さと同じである。(千)

この説明は、別のものとの比較(共通点をいう)と対照(差違点をいう)による説明である。共通点と差違点をいうことは定義ともよばれるもので、説明の根本である。前の感覚描写による説明に対して、関係による位置づけをする説明と言えよう。

○ 「熱い玉露を」といくら所望されても決して熱い湯をじゃっと

入れないよう。(千)

これは「ぬるい」ということに対する逆の場面を仮定して、それを禁止・否定する言い方である。ペーカー氏の分類によれば、仮定法(hypothesis)は誇張であり、否定法(adioxis)は強調である。この拡充は一種の強める効果をもつものと言えよう。

以上「ぬるい」ということを拡充するのに、科学的数値による説明と、感覚描写による説明と、他との関係による説明と、逆の否定による説明との四種類がここで使用されていることが明らかになった。

つぎに「ゆっくり入れる」ということについて、

○ きゅうすの端からそっと注ぎ(千)

という説明は、感覚的描写的である。なお、

○ 「箱入り娘」のように育ったお茶ですから(小川)

というの、「ぬるい湯でゆっくり入れる」ということの原因である。何故そうするのか、理由について、比喩を使って拡充したものである。

○ やはり煎茶同様、器を湯通ししてから……ふたをして三分くらいそのままにしてつぐと(千)

というの、他との関係による拡充と、また「ぬるい」湯を生かすための、前後のとりあつかい方についての拡充である。理由や結果ではなく、「ぬるい湯をゆっくり入れる」ことに対して、先行し、後行する行動である。従ってこれは、時間的に前後の行動を拡充した説明といえよう。

○ たいへんおいしくいただける。(千)

これは「ぬるい湯でゆっくり入れる」という行動の結果としての

価値についての言及である。価値的拡充といえよう。

以上、「ぬるい湯をゆっくり入れる」という行動の説明の拡充として、上にあげたもの以外に、さらに、理由の説明、前後の行動の説明、価値の説明があることが明らかになった。

つぎに、②の湯の量については、要約すれば、

○ 湯の量は少なくせよ。

ということになる。このことについては、つぎのような拡充がなされている。

○ 葉がやっとひたひたにつかる程度のお湯を（小川）

これは、湯の量が少ないことを感覚描写で説明しているとみることができ。これに対して、

○ きゆうすの中でお茶が動くようにつぐとまざる。（千）

と言うのは、逆に誤って多くついだ場合を感覚描写で述べたものである。感覚描写であるということは両方同じであるが、千氏のは、同時に逆の否定という面をもった拡充である。否定は *apodixis* で強調法である。また、文末の「まざる」は価値（マイナス面）にふれたのであるが、「ついではいけない」というような禁止にくらべると遠曲法 (*euphemism*) 的な言い方である。従ってこの文は事実については強調しているが相手に対してはやわらげた言い方になっていると言えよう。

○ 煎目は葉にお湯を吸いとられるので量も少なくなりませんが、それでよいのです。（小川）

○ 玉露は量でなくあくまで味本位ですから少なくとも気になさることはありません。（小川）

これは何れも量の少ないことによってひき起される相手の不安に

応えることばである。千氏は「……してはいけない」と逆の否定、

禁止という強調的な言い方をしているのに対して、小川氏のは、初心者に予想される不安の心理に対して、それは心配しなくてもよいのだと、しかも理由を付して、安心させる言い方である。「強調」よりは、より細かに限定する「洗練」に入るべき言い方であろう。

また

○ 湯の量の少ないことがたいせつなこと。（千）

というのは湯を少なく入れることの価値について拡充したものであるが、これは「湯の量は少くせよ」と相手に命令することをやわらげる言い方で遠曲法の一つとみられよう。

○ ほんとうの玉露の味を味わってみようと思われたら……入れてみることです。（小川）

これも少なく入れることの価値を述べたものであるが、それを仮定法 (*hypothesis*) で言っている。仮定法は事実を誇張し強める言い方であり、価値を言うのは遠曲法の一つである。相手に対してはやわらげながら、事実については強める言い方と言えよう。

以上「湯の量は少なくせよ」ということの拡充として、

感覚的描写による説明（イメージ化）

逆の否定による説明（強調）

より細かに限定する説明（洗練）

価値をいうことによる説明（洗練）

仮定による説明（誇張）

などがあることが明らかになった。

つぎに、③の茶の量については、

○ 茶量は一人分小さじ一杯くらいにせよ。

というのが要点であるが、小川氏は、

○ 茶のよしあしによって違います

と、質の違いによって量が変わることを限定として言っている。「洗練」の表現法に入るものである。

千氏は「五人前で小さじ四杯ほどの量」と全体でおさえることによつて細かさのあらわれる指示をしている。これにくらべると、

「一人分小さじ一杯」というのは単純化した大ざっぱな指示である。数量の説明法として、このような全体を示すことによる精細な示し方があることに留意すべきであろう。

ここでは、

限定する説明（洗練）

全体との関係による細かな説明（関係）

という表現法を見ることが出来る。

つぎに④の茶の味の変化について、小川氏は、

○ 一煎目は甘く、二煎目は苦く、三煎目は渋く出ます。

と言っているのに対して、千氏は、

○ 第一煎でかおりを、第二煎は甘味、第三煎で苦味をと言っている。どちらがほんとうか私にはわからないが、千氏の変化の方がより美しいように思われる。殊にかおりという味でないものを最初に置いたところに面白味がある。

が、この一煎、二煎、三煎の説明において、両者の最も大きな違

いは、小川氏は、客観的事実として三つの味の変化を述べているのに対して、千氏は

○……と三様の味を楽しむのが玉露好きの醍醐味とする。

という表現をしているところにある。これは終りの、

○ お客様に勧めるのは三煎目まで、あとは使わないのが普通になっている。（千）

という表現と同様に、それが世間に認められている一般法則だといふのである。いわば、一般法則という権威ある価値によって、相手に行動をすゝめる表現法であるといえよう。

なお、小川氏の述べているお茶の茶わんへの注ぎ方の要点は、

○ 玉露茶わんに均等に入れよ。

ということであるが、これにはつぎのような拡充がなされている。

○ 盆の上に並べた

というのは玉露茶わんの描写による説明である。

○ 何度も往復しているうちによい味が出ます。

○ 初めのうちは味はなく、あとになるほど出て、最後の一滴ではんとうの持ち味を出すために

というのは、そういう行動をする理由である。ここでは、拡充するものとして

描写や具体による説明

価値の説明

理由の説明

が行われている。

四 表現法の体系

— 説明文の場合 —

以上、極めて日常的な二つの説明的文章で使用されている表現法

をまとめてみるとつぎのようになる。

- 一 ことがらを明らかにするための表現法 (対象に向かう)
 - 1 感覚描写や具体的行動による方法
 - 2 他との関係を示すことによる方法
 - a 他との共通点と差違点を示す。(定義)
 - b 逆の否定をする。
 - c 前後を明らかにする。
 - d 全体と部分の関係を示す。
 - e 限定する。
 - 3 数値を示すことによる方法
 - 二 相手に行動をすゝめるための表現法 (受け手に向かう)
 - 1 行動の理由・目的を示すことによる方法
 - 2 客観的価値や、原理・法則を示すことによる方法
- これらのうち、何れも1は主として小川氏に、2は主として千氏にみられる方法である。1は具体的、感覚的、直接的表現とすれば、2は観念的、論理的、間接的表現とみることができよう。これも一つの分類基準ではなからうか。
- 以上、この日常的な文章の表現法を分析してみると、修辞学が明らかにした表現法とは違ったものが主となっていることがわかる。これらは、受け手にいかに強く訴えるかということよりは、いかに正確に緻密に、思考を精密にし、かつ受け手にはすなおに受け入れられることを主とするものようである。このような表現法が、我々の日常の文章を書くのに必要な基本的な表現法である。
- 古い修辞学は亡び、新しい修辞学の再生が世界的に問題になっているが、こういう方向が、再生のための一つの方向として考えられるべきではなからうか。

注

- ① C. K. Ogden and Richards, *The Meaning of Meaning* (1923) 石橋幸太郎「意味の意味」(昭11・1)興文社、一〇ページの図に基く。
 - ② Marjorie Boulton, *The Anatomy of Prose*, Routledge and Kegan Paul, 1954 P149-173
 - ③ 島村龍太郎「縮刷新美辞学」早稲田大学出版部(明治三五・五初版)三二二ページ
 - ④ Sheridan Baker, *The Complete Stylist*, Thomas Y. Crowell, 1966 P320—332
 - ⑤ 小川八重子「煎茶売茶本流」婦人画報、昭43・2月号
 - ⑥ 千宗興「裏千家」N・H・K女性教室 昭33・12月号
 - ⑦ Charles W. Mulligan, *Michael P. Kammer, for Writing English*, Loyola University, 1960 P531
 - ⑧ 波多野完治「レトリックの再生」『文章心理学』三省堂 昭10・10 1ページ—23ページ
- 波多野完治「新しいレトリックと文章心理学」『最近の文章心理学』大日本図書、昭40・4 1ページ—41ページ
- Martin Steinmann, *New Rhetorics*, Charles Scribner's sons, 1967
- W. Ross Winterowd, *Rhetoric — A Synthesis* —, Holt, Rinehart and Winston, 1968

—— 広島女子大学教授 ——

『国文学攷』 第五十七号

正 誤 表

ページ	行	誤	正
9 上	4	Simil	<u>Simile</u>
9 下	8	Circumloction	Circumloc <u>u</u> tion
9 下	10	Colloquialism	Collo <u>q</u> ualism
10 下	16	auxeisis	auxe <u>s</u> is
	19	moisis	<u>meiosis</u>
11 下	2	presopopeia	prosopop <u>o</u> eia